

てこな・ミュージック・ジャーナル

ペンに生きた 一人の女性

クララに夢中

作曲家についてこれまで何度も取り上げてきましたので、今回は、そのような作曲家たちへの関心をペンで著した一人の女性に焦点を当ててみたいと思います。

渋谷の松涛に<クララ>というケーキ・ショップがあります。私は通りかかるたびに、ロマン派を代表する作曲家ローベルト・シューマンの妻で今にその名が残る大ピアニスト、クララ・シューマンのファンなのかしらと勝手に推測していました。それが当たっていたことが分かったのは、つい先ごろ出版社から、戦前の音楽書を復刻したいと思うので、ショパンを一応専門とする私にその判断を仰ぎたいという内容の電話からです。著者の名は原田光子さんで、その親族の一人がケーキ・ショップ<クララ>の経営者だということです。原田さんは著作でショパンやリストなど、ロマン派の作曲家を取り上げていますが、中でもクララに理想の女性像を重ねるかのよう、情熱的にペンを走らせたことが知られています。

原田光子さんのこと

1909年に原田さんは東京高輪に貿易を仕事とする父のもとに生まれ、14歳で親とともにドイツに船で向かいました。そのとき日本初の世界的ピアニストとして活躍する幼い原智恵子さんが留学のために同行していたと伝えられています。

第二次世界大戦直後まで日本の女性には参政権すらなく、学問に生きる女性など非常に珍しい時代です。ピアノは特権階級の婦女子の教養とみなされ、音楽の専門家を職業とする女性ほとんどに限定されていました。

離婚、そして甘ペンに情熱

16歳で帰国すると、中村紘子さんなど著名なピアニストの師であるレオニード・コハンスキー門下に入り、やがて周囲の子供たちを教えるようになりました。残る写真によると長身、知的で勝気な雰囲気、原田さんは、23歳で乞われて山口の旧家に嫁ぎますが、すぐに離婚することになってしまいました。心の痛手を埋めたのはドイツ語と英語の素養で、原書を手にしてはそれをもとにした音楽書を書くようになりました。

市川市文化振興財団 文化芸術専門員 小坂 裕子

憑かれたかのようにペンを走らせると、31歳で『真実なる女性クララ・シューマン』を世に問うて注目され、翌年には『愛の使徒リストの生涯』『大ピアニストは語る』『天オショパンの心』『クララとブラームスの書簡集』を次々に世に送りだしました。これらの評伝に感じられるのは、愛する女性に支えられた作曲家という共通する執筆基盤です。

注目すべき著作群

1946年37歳、幼いころに発症した結核が悪化して、マラーとアルマの物語を構想する中、死の床についてしまいました。原智恵子さんによるショパンの「別れの曲」が、情熱をもって音楽を語った原田さんを天に送る曲となったそうです。

音楽家について書くことで、音楽を愛することを表明した原田さんには妹一人、第二人がいました。そのいずれもすでに亡く、一人の弟の奥さんの息子が渋谷のケーキ・ショップ<クララ>のオーナーとなったのです。このケーキ・ショップの場所が原田家の屋敷跡で、そこにはドイツから持ち帰り光子さんが弾いていたピアノ・ベヒシュタインがあったそうです。空襲で屋敷もるとも焼けてしまい、かろうじて残った写真はセピア色となっても、その著作には対象とした音楽家への愛が今もなお生き生きと感じられます。自らの結婚生活では実現できなかった、能力ある男性を支える女性を描きたい、そのような言葉も残っています。それは戦前の女性の考え方を代表するようになって、独自の視点で深められた作曲家理解とも言えるのではないのでしょうか。

クララとブラームス

精神障害に苦しむ夫を支えたクララへの思い入れがとりわけ強く、クララを支えたブラームスへの共感表明、そこから生み出された『クララとブラームスの書簡集』など、原田光子再評価の気運が高まっています。時代を越えて生き続けるペンによる音楽家へのあるいは作品への情熱表明である音楽家像。それを手にとって読み、そして描かれた音楽をCD、あるいは演奏会で聴く。そこにさらに音楽に対する深い理解とあらたな感動が生まれる、原田光子さんの著作の原点に触れる機会を得て、そのような思いに今捉えられています。